



4年間を振り返って

近藤幸子

☆新米教員として

子ども学部1期生の入学と私が大学の教員になるのと同時であった。幼児と永年生活し保育してきた私が、突然大学生に対して授業を行うことは、教える内容は幼児教育というこれまで培ったものであっても伝え方が全く違うので4年間試行錯誤の連続であった。

学生にとっては随分心許なく思えた日々であったと思い大変申し訳なく思っている。

香川学部長始め、田中麻里先生他多くの先生方に助言や協力を頂きながら、新米教師として「保育内容総論」の授業や「保育実習指導」「幼稚園教育実習指導」の授業を私なりに考えながら行ってきた。

また、総合研究室の櫻井三岐子先生、大城先生、樋渡先生、田中早苗先生と非常勤講師の井上先生の大きな支えで4年間の実習指導が曲がりなりにもできたと大変感謝している。

これまで実習がある度に、「10日間無事に頑張ってきてね!」と祈るようにどきどきしながら過ごしてきた。実習指導の授業は自分なりに試行錯誤し改善をはかってきたつもりだが、毎回ハプニングが起きるのではという不安感は最後までぬぐえなかった。

一方「保育内容総論」の方は4年間繰り返すうちには少しずつ内容が精選でき、成果が出てきたように思う。特に4年目の授業は、学生に出席確認も兼ねて毎回授業後に、概要や感想を書いて提出してもらうようにしたことで、少しずつ学生に保育の本質が伝わったことが垣間見えた。また、保育への期待や意欲が次第に高まってきたことが行間から少しずつ伝わってくるようになった。

このことは、自分の授業になかなか確信がもてずにいた私にはとても嬉しい4年目の手応えであった。

☆学生の成長

4年目の秋、4年生が最後の保育実習で学外保育園に行き、3年生が学外幼稚園実習に行った頃から、実習先の先生方から好意的な評価を頂くことが出来始めた。巡回指導の先生方からも学生の頑張り振りや実習園からの肯定的な評価を聞けるようになった。

学生が保育者としての自覚に目覚めて、頑張り始めてその真価を発揮し始めてくれたのだ。

そして、4年生、3年生の実習日誌を読んだ時、その確かな成長をはっきりと感ずることができた。実習指導の授業の中で繰り返し、保育者の援助の意図を推察することや子どもの内面を探ることの重要性等を話してきたことが長い時間を掛けて、少しずつ学生に伝わっていたことを実感した。昨年まではそこまで実感出来ずに、「もっと!もっと!」と期待をもち過ぎて、彼らの小さいけれど着実な成長がどこか頼りなげに感じてしまっていた。今、3年生の実習日誌と4年生実習日誌を並べて読んでみると、3年生は3年生なりに成長し4年生は4年生なりに更に進化していることを冷静に見つめることができる自分がある。私自身も4年間で学生への眼差しが変わったのだと感ずる。嬉しい変化である。

実習とは違うが、4年生後期に教職実践演習の中で久しぶり4年生と関わった。3人で分担し5

コマずつという短い授業であったが、そこでも彼らの確実な成長を感じた。

まず、人間的な成長である。授業を受ける姿勢が随分変わって親和的で肯定的な姿勢が感じられた。この姿勢は保育者や教育者にとって欠かすことができない重要な資質であり本当に嬉しかった。大事なことを掴んでくれていた。選択科目で、人数も少なく一人一人と密に接することができたのでそれぞれが大人になり、社会に出て行く準備ができてきたことが感じられた嬉しい授業であった。

授業の後半は、模擬授業をしたのだが、その活動の展開ぶりや周囲の学生の雰囲気の中からも4年間の学生同士の仲間関係の深まりや、模擬授業に対する協議内容からも、彼らが保育観をしっかりとつことができてきたことが伺えた。そして、最後の「保育者として大切なこと」、「幼児教育で大切なこと」というテーマのレポートからも、彼らがそれぞれの捉え方ではあるが、幼児教育の基本的な部分を学ぶことができた実感できた。

幼児の場合は幼稚園の3年間という長いスパンの中でそれぞれが時間をかけてその子どもなりのやり方で成長していく。長い経験の中でその見通しがもっていた私は、ゆっくり楽しみながら、幼児を信頼して待ち、保育をすることができたと思う。

しかし、大学生にはその成果をもっと早く求め過ぎていたのだと悟った。しかし、私が伝えたかったことが大半の学生に伝わっていたことがわかり、少し安堵している。

私は最近になってようやく、不十分な指導しかできなかったという反省や申し訳なさと共に達成感もちょっぴり感じるようになり、西九州大学子ども学部で仕事をさせていただいて良かったと思えるようになった。

今後子ども学部へ

実習指導に最後まで不安を感じていた原因を振り返ると、学生の基本的なマナーや生活態度等をうまく指導しきれなかった点が大きいのではないかと思う。

この背景には、学生の姿勢、心構えの問題がある。

学生に「自分は社会に出て保育者や教育者となって働くのだ」という気構えが弱いのではないかと思う。この心構えをどのようにしっかりとつくっていくかが今後の課題である。

実習指導の授業の中でいくら「挨拶を自分から元気に!」、「言葉遣いを保育者らしく丁寧に!」等々を指導しても付け焼き刃的な感じで空しさがあった。

「実習中だけ保育者らしく、教育者らしくはできない!」のだ。

子ども学部に入學した時点から、保育者、教育者を目指すために基本的なこととして生活指導や心構えの指導を始めなくては間に合わない。しかも子ども学部の教員全員で一丸となって指導していかないとできないことだと思う。

カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーもできて、4年間でようやく形は整ってきた。これからは子ども学部の精神的な部分をしっかりと培っていかなくてはならない。子ども学部全体で凛としたけじめある雰囲気を創ってほしいと心から願う。

どうしたら子ども学部の学生全員にどこに出しても恥ずかしくない保育者、教育者として人間性を身につけさせることができるのかがこれからの真の課題だと思う。

この課題の成否により、子ども学部の発展や充実が出来るかどうか決まるといっても過言ではない。

新しく子ども学部に入られる先生方と共に、皆様で力を合わせてこの課題に取り組んで下さることを大いに期待しています。